柔道大国・フランスの実態を探る

濱田初幸*

Actual Conditions of Judo Great Nation France

Hatsuyuki HAMADA*

Abstract

As a part of the Overseas Advanced Educational research Practice Support Program 2004 of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology's, I had a chance to study in Europe to conduct a research project "Research on national training methods of Budo (especially of Judo) and sports club management of France and Germany". Although it was conducted in two of the top Judo nations, France and Germany, the report on France was presented. The 7th month long research was carried out in France between March 7 and April 29, 2004, then in Germany between April 29 and September 7,2004.

The organization, Federation Francoise de Judo, Jujitsu, Kendo et Disciplines Associées (FFJDA) is a sports organization which includes 9 Budo related sports (Judo, Jujitsu, Kendo, Sumo, Iaido, Naginatado, Jodo, Sports chanbara, and Gymnastics) and affiliated with Ministere de la Jeunesse, des Sports et de la vie Associative. The large number of registered members, 539,733 individuals and 5,500 clubs, indicates its successful diffusion of judo nationwide.

The French national training system forms a centralized structure under national control, and consists of INSEP (Institut National du Sport et de l'Éducation Physique) as the supreme training center and local training bases such as Poles France and Pôles Espoirs. Their instructors, must pass BEES examination (Brevet d'État d'Educateur Sportif) operated by FFJDA and Ministere de la Jeunesse, des Sports et de la Vie Associative in order to be authorized. The same system applies to many other sports.

With national control, French judo has a better environment than ours; however, as seen in the disastrous defeat in Athens Olympics, they have realized there is an internal problem with their instructing methods and are undertaking reformation. When their instructing ability improves in the future, they may surpass Japan in competition performance.

While keeping Japan's traditional judo style, there are many values that we should learn from French Judo, such as the national training system and the instructor's license system.

KEY WORDS : France, Judo, Training system

Ⅰ．はじめに

筆者は，文部科学省主管の平成16年度「海外先進教育研究実践支援プログラム」に採択され欧州に留学する機会を得た。研究題目は「フランス・ドイツにおける武道（柔道を中心に）の強化指導方法及びスポーツクラブ運営方法の調査研究」とし，欧州の強豪国であり柔道の歴史を紐解いても伝統国として知られている，この２カ国を対象に調査を実施した。派遣期間は，平成17年３月７日から４月29日までフランス，４月29日から９月７日までドイツに滞在し，合わせて約７ヶ月間に渡

*鹿屋体育大学，National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

る調査活動であった。

以下本稿では，それらの中から，フランス関連について報告する。

フランスは柔道人口の拡大に成功しているばかりでなく[1)]，シドニーオリンピック（2000年）男子100kg 超級決勝戦において日本の篠原信一選手に勝ち，金メダルを獲得したD・ドゥィエ選手らを輩出した国でもある。さらに大阪で開催された世界柔道選手権（2003年）男子団体戦決勝で，日本を撃破し優勝するなど，柔道が非常に盛んなヨーロッパ諸国の中でも最強豪国として知られている[2)]。

なぜこの国において，日本で創生された柔道がこれまでに普及発展したのか，また，どのような方法で強化されているのか，フランス柔道の実態を調査することに以前より強い関心と興味を抱いていた。柔道がグローバル化していく中で，この国が国際柔道連盟（IJF）加盟国に与える影響力は強いのではないかと考えている[3)]。例えば数多くある国際大会の中でもヨーロッパAトーナメントとして強豪国が多数参加するフランス国際柔道大会では，早くからカラー柔道衣を採用してきた経緯がある[4)]。この国の組織の現状や運営方法，活動実態を探ることは，留まることなく進化拡大していく世界柔道の方向性[5,6)]（2003年度 IJF 総会報告187カ国・地域から，2005年度同会報告では195カ国・地域に微増）を示唆するものであり，我が国の柔道界およびスポーツ界の発展にも寄与するものであると確信している。

Ⅱ．主な調査機関，地域

INSEP（国立スポーツ体育研究所・Institut National du Sport et de l'Education Physique）

INJ（フランス柔道研究所・Institut National du Judo）

ブルターニュ地方

ロワール地方

プロヴァンス地方

ノルマンディー地方

Ⅲ．フランス柔道連盟の組織について

フランス柔道連盟（FÉDÉRATION FRANÇAISE DE JUDO, JUJITSU, KENDO ET DISCIPLINES ASSOCIÉES，以下 FFJDA と略称）は，柔道，柔術，剣道，相撲，居合道，薙刀道，杖道，スポーツチャンバラ，体操の９種目の武道関連の競技を包括した団体で，国家スポーツ青年省（MINISTÈRE DE LA JEUNESSE, DES SPORTS ET DE LA VIE ASSOCIATIVE）傘下にあり，その登録者数は，約54万人である[7)]。

日本柔道の普及強化システムを支えているのは中学，高校，大学などの学校組織が大きく貢献しているが[8)]，フランスの底辺を支えているのは各県，各市町村に存在する柔道クラブがその基盤を成している。クラブ数は5500団体[9)]，フランススポーツ競技別登録人口ランキング３位に入る人気

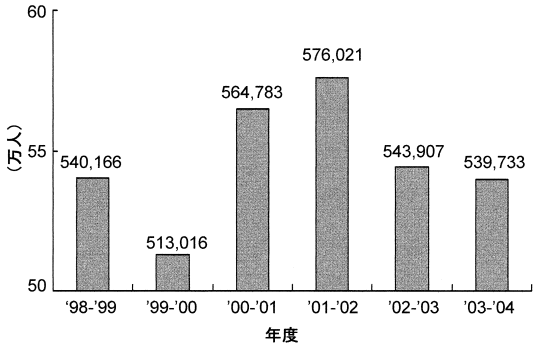


図１　フランス柔道連盟登録者数の推移
（2005 DONNEES GENERALES より作成）

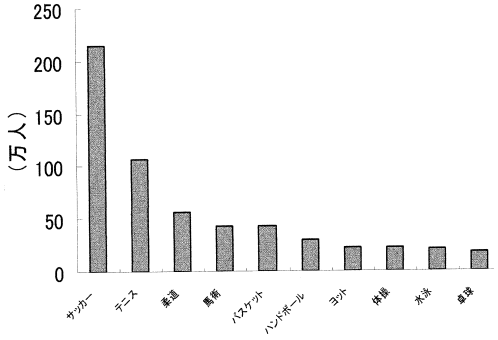


図２　2002－03年におけるフランススポーツ競技別登録人口ランキング
（Observatoire des Licences 2002-03 より作成）

の施設を利用しているものから個人経営まで様々な形態で運営されている。

フランス国土は96本土県と４県の海外県を含め，100県で構成されている（県名の頭文字からアルファベット順に数字で表記されたコード番号が決められていて，例えばパリの場合はCD75で表記され，自動車のバックナンバーなどにもこのコード番号が使用されている)。

FFJDAの組織は，フランス全土100からなる県単位を近隣の複数県を統合した「レジョン(REGION)」と言われる25地方圏と，さらに近隣のレジョンを統合した「インターレジョン(INTER REGION)」と言われる９ブロックで構成されている。各種フランス全国大会に出場するための予選方法は，概ね各クラブ，県，レジョン，インターレジョンの順に行い，これらの予選を勝ち上がった選手に出場資格権が与えられる。

２．FFJDAの役割

FFJDAの組織業務は以下のようなセクションに分かれている。

－ アドミニストレーション（管理・登録)
－ 教育・指導者育成
－ 競技力向上・強化
－ クラブの推進・サービス
－ 普及・発展

３．FFJDA年間予算

2004年度の予算は約32億２千万円であるのに対して，同年度，(財)全日本柔道連盟決算報告は14億55万円である。FFJDA予算規模の大きさが理解できる。

４．フランス柔道研究所（INJ）

FFJDAの執行部は，新会長J.ルージェ（2005年２月就任，1975年軽重量級世界選手権者）以下６名の副会長，25名の理事で組織されている。その本部は，パリ市街南西14区シャティヨンに2001年に総工費40億円を投じて新装された連盟独自の建物INJの中に置かれている[10]。講道館をイメージして建てられたINJには，常時50名の職員（内10名が国家資格を持った指導者)[11]が勤務し，幹部はそれぞれに専用個室オフィスが用意されているばかりでなく，VIPスポンサー専用の部屋，ビデオルーム，ライブラリー，国際会議対応可能な会議室や200名以上が収容できる教室，ジャグジー付サウナ，フィットネスルーム，ダイニングルームなど近代的な付帯設備が２，３階に完備されている（フランスでは１階が０階になるので実際は３，４階に相当する)。道場は1,800名の観客収容席を備え８試合場を有する広大なメイン道場と地下にはFFJDA発展の貢献者，日本人指導者・粟津正蔵九段（在仏56年，82歳，レジオン・ドヌール勲章受賞）の名を冠した粟津道場（３試合場と剣道１試合場）が設けてある。

INJにダイレクトに隣接して，3,600名が宿泊可能なホテル・ホーミュラー１（１泊40ユーロ）が関連施設としてリンクしてあり，国内はもとより国際合宿や各種大会，講習会等で有効に利用されている。INJのロビーや廊下，会議室，各セクションの壁には嘉納治五郎師範の遺影や「精力善用」，「自他共栄」の柔道精神が描かれたポスターや新渡戸稲造著『武士道』から抜粋された「礼儀」「謙虚」「尊敬」「誠実」「勇気」「自制」「友情」「名誉」など日本の美徳とされる格言などが日本語，フランス語で書かれた額に飾られ，柔道創始国日本に対する尊敬の念や文化への関心の高さが窺える。さらに，IJF公認柔道博物館，IJF柔道殿堂が１階ロビー奥に設置され，数多くの柔道に関する資料，モニュメント，グッズ，歴代チャンピオンの写真などが豊富に備えてある。施設見学も自由にでき，柔道に関する国際的な情報や創始期から現代に至る歴史を学ぶことができるなどアカデミックな役割を担っていて，柔道情報発信基地としてフランスのみならず世界柔道発展の為に多大な貢献を果たしている。

INJ **外観**

INJ **柔道博物館**

INJ **とホテル**

FFJDA **発展の貢献者・栗津九段と**

INJ **国際会議室**

INJ **８面の主道場**

５．強化システムと選手養成

（1）国立体育スポーツ研究所（INSEP）

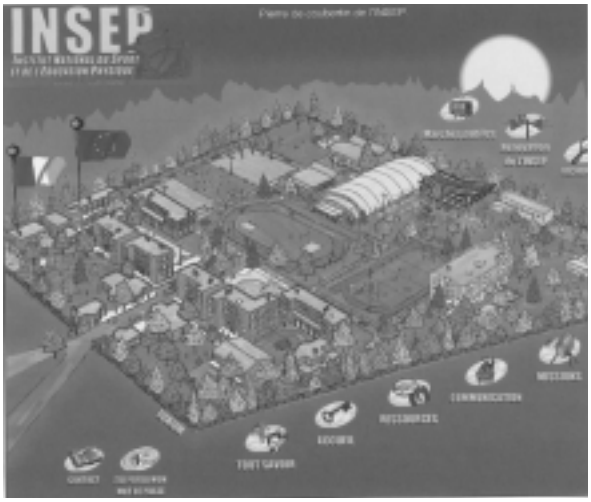
INSEP はパリの南東ヴァンセンヌの森の中にあり，オリンピック競技を中心に26競技団体からなるナショナルチームの選手たちが年間を通して合宿生活を送り，世界の舞台でメダル獲得を目指して強化に励むフランススポーツの頂点に君臨する強化拠点センターである。プロ組織を有するサッカー，テニスを除き，多くのオリンピック競技の選手たちが厳しい国内予選を勝ち上がり，ナショナルコーチの指名を受けて選抜され，恵まれた環境の中でトレーニングに励んでいる。アテネオリンピックでは金メダル12個を含む22名のメダリストが，ここ INSEP から輩出されている。俗に「チャンピオン製造所」と呼ばれる所以でもある。この国立機関の目的は，スポーツ競技力の向上のみならず指導者育成を目的として設立されている。

INSEP **アテネオリンピックメダリストポスター**

(2) INSEP の環境

INSEP は動物園，植物園，遊園地，サイクリングコース，湖などが点在し，その周囲は無数の広葉樹林に囲まれた自然豊かな環境の中に設立されている。敷地面積34万㎡を有し，屋内外に400mトラックの陸上競技場，サッカー場，ラグビー場，多目的体育館，格技体育館，テニスコート，室内プールなどあらゆる競技に対応できる施設が完備されている。また，関連施設として宿泊棟，大規模食堂，高等学校（リセ），医科学研究所，医療施設，図書館，体力測定室，バイオメカニクス実験室，スポーツ心理カウンセラー室なども設けられている。さらにサウナ，マッサージルーム，カフェテリア，売店，美容室，書店，ゲーム場なども備わっている。

この整備された施設の中で約1,000名の選手が活動し，それを支えるスタッフ約500名が勤務している。全ての競技の中でも期待の大きい柔道選手の人数が最も多く，約150名（外部から毎日練習要員として通っている者も含む）が登録され，月曜から金曜日まで終日練習を行っている。



INSEP **概略**

INSEP **はヴァンセンヌの森の一角にある**

INSEP **正面**

INSEP **陸上競技場**

INSEP **室内陸上競技場**

INSEP **ビデオ研究室・柔道パート**

INSEP **功労者モニュメント**

INSEP **食堂セルフサービス風景**

INSEP **食堂**

(3) INSEP における柔道ナショナル強化体制

INSEP における FFJDA ナショナルチームの組織は，Ｆ.カヌー（'87，'89世界選手権86kg 級優勝)が専務理事（DTN：最高責任者）に就き，S.トレノー（'91世界選手権95kg 級優勝）男子ヘッドコーチ，Y. デルバン女子ヘッドコーチ指揮の下，男女それぞれ３名のシニアコーチ，２名のジュニアコーチ，トレーナーを含め13名がフルタイムで指導に当たっている。選手は16－33歳までの103名がナショナルチーム強化選手として指名を受け，フランス代表として世界の頂点を目指して厳しい稽古に励んでいる。男女の人数比は男子54名，女子49名，内70名が学生である。日本では見られない特徴として，近隣の実力のある選手を指名し，連盟が費用を払い29名の柔道家がナショナル強化選手の稽古相手として参加している。また，パリ近郊のクラブの協力を得て，62名の柔道家が INSEP の練習に特別参加している（この費用はクラブで払う)。

INSEP の使用料は一人当たり年間450€（約￥63,000，シャワー，サウナ，ウエートトレーニング等の施設利用費含む)，宿泊費，食事費で一カ月約10万円かかるが，その費用は FFJDA が支払う。

2005年４月現在，103名中，55名が INSEP で合宿生活をしている。高校生や大学生はここから通学することも可能であり，またアパートを借りて通学，通勤してもよい。練習は男女別で午前と午

後に分けて稽古をしているが，授業を受講できない選手には，FFJDA が学校機関に依頼し特別授業を受講することができ，また，遠征合宿では数名の先生を引率して，遠征先で授業や補習授業を行うなどの特別措置も行っている。こういった出張授業などの場合は FFJDA が授業料を支払うなど，学業と柔道の両立を視野に入れ，現役選手終了後の将来を考慮した強化体制を構築している。

就職に関しては一部の強豪選手に限られているが，FFJDA が交渉し，雇用主の賛同を得て，現在15名の選手が給料支給を受けながら柔道に専念できる環境にある（軍隊，市役所など公的機関，企業等と契約している)。道場の整備に関してもさらに拡張することや（現在でも決して手狭ではないが)，新たに道場内に医療室を設けることも決定していて，INSEP が目指している医療分野での更なる充実が進展している。

INSEP 柔道場

(4) 地方における強化体制

FFJDA は INSEP を頂点として，各地方に青少年を対象に，年代別の柔道強化拠点を設置し中央集権化体制を構築している。この地方強化拠点はポール・フランス (Pôles France，以下 PF)，ポール・エスポワール (Pôles Espoirs，以下 PE)，クラース・デパルトゥマンタル柔道（Classes départementales Judo，以下 CDJ）と言われる機関であり，国家青少年スポーツ省，地方公共団体，学校機関と FFJDA が協力連携し，地方における柔道選手育成，指導者養成の使命を担い設立されている。この地方強化拠点で強化育成し選抜された才能豊かな選手が，年齢や段階を踏み，最終的に INSEP に招聘される。こうしたシステムが国家的レベルで制度化され，フランス柔道強化の根幹を成している。

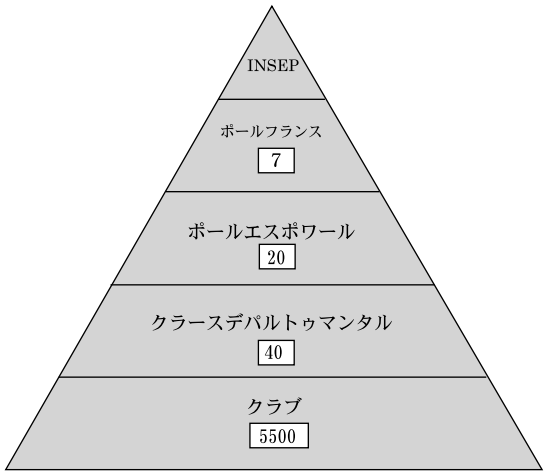


図３　FEJDA 強化システム

●ポール・フランス（PF)

PF は INSEP 傘下の強化機関で全国に７箇所設置されている。これらはジュニア（17－19歳)，シニア（20歳以上）の選手を中心に強化育成を図る機関である。地域を越えた強化機関であり，「地方版 INSEP」と言える。全国フランスカデ選手権（15－16歳）において，上位入賞５位まで６名の選手がジュニア年齢に達した時点で PF 入学資格を有する。ただし，ナショナルコーチの推薦を受ける必要があり，将来性なども考慮され，選考基準は厳しく設定されている。PF は地域によって男女混合，男女別と，３パターンに分かれている。特にポワティエは女子のみを強化対象とし，フランス地方女子強化の中心的存在として機能している。PF の選択は個人の判断に任され自由であるが，通常は自宅に近い地域にある PF を選択する傾向にある。近年は有望選手を多く輩出しているところに入学希望者が増加し，強化育成が上手くいっていない PF は廃止される可能性がある。FFJDA が「量から質へ」の方針を採っており，また予算削減のため，現在の７箇所から５箇所に縮小する方向で計画が進められている。

これらの柔道強化機関は地方体育スポーツセンター（CREPS:Center Regional d'Education Physique et Sportive）と連携協力し，その現存施設を活用して運営しているところがいくつかある（ポワティエ，ボルドー，ストラスブルグ)。FFJDA を中心に地方柔道連盟，国家スポーツ青年省，地方公共団体，学校機関と連携を取りながら運営しているが，すべてが良好な関係にあるわけではなく，特に学業との両立の問題などいくつかの課題点も見受けられた。

ポワティエ PF 女子選手達

●ポール・エスポワール（PE)

年齢区分はミニム（13－14歳)，カデ（15－16歳）を対象に技術養成を目的とした機関であり，将来のトップレベル選手育成のためのものである。また，PF に入ればすぐに訓練に取り組めることが可能なように，若い柔道家を体力的にも精神的にもレベル向上させることを目的としている。REGION レベルにおける強化拠点で20箇所の PE が存在する。

マルセイユ PF・PE の選手達

●クラース・デパルトゥマンタル柔道（CDJ)

県レベルでの強化育成普及を目的として，バジャマン（11－12歳）あるいは13歳までの若い柔道家を集めて育成する機関で，柔道人口普及拡大を主な目的として，全国に40箇所設立している。クラブ指導者の一部には，この若年層から強化するのは年齢的に早すぎるのではないかといった意見も囁かれていた。しかし，FFJDA は各県毎に CDJ １箇所を設置することを目標とし，早期年齢からの育成を試みようとする構想を持っている。

ノルマンディー地方の CDJ の選手達

Ⅳ．指導者資格認定制度と認定試験

フランスで柔道を指導するためには，国家スポーツ青年省と FFJDA がタイアップして実施している国家試験にパスしなければ，フランス国内において指導することや道場を持つことは許されない。1972年に創設されたこの国家資格は以下のような３段階のレベルに分かれている。

１．Brevet d'État d'Educateur Sportif 1er-degré
２．Brevet d'État d'Educateur Sportif 2er-degré
３．Brevet d'État d'Educateur Sportif 3er-degré

通称ブルベデタ（以下 BEES）と呼ばれるこの国家試験を受験し，ディプロム（資格証明書）を取得しなければならない。

(1) BEES の活動内容及び指導対象

●BEES1級：教育・組織（編成)，基礎体力作り，スポーツ活動の運営。選ばれた種目の中で，ハイ

レベルなスポーツ実践を要求する。各県やクラブにおける指導が中心である。

●BEES2級：カードルテクニック（管理職，Cadre Technique，以下 CT）としての技術の改良，教育や訓練の計画，運営を行う中心的指導者。レジョン，インターレジョン，国家的レベルにおいて指導を行うことができる。

●BEES3級：鑑定や探索（研究）を主な業務とし，ナショナルレベルや国際大会レベルの指導を行うことができる。制度としては残っているが，現在はその資格に相当するポストの空きがなく，あまり機能していない。

(2) BEES の受験資格

BEES1級：18歳以上で２段以上を取得している者

BEES2級：BEES1級を取得してから２年以上が経ち3段以上を取得している者。

BEES3級：BEES2級を取得してから４年以上経過したものに資格が与えられる。

フランスでは，柔道に限らず多くの競技団体において，この国家資格を取得しなければ，スポーツ指導者の職業に就くこと，また指導することは許されない。このことは法律で定められていて，国家管理されている。また，団体交渉権やストライキ権も法律的に認められている。さらに，BEES2級を取得した資格所有者は CT 登用試験を受験することができる。CT は次の二種に分類されているがどちらのポストに就くのか，その決定は FFJDA がこれまでの競技歴，指導歴などから総合的に判断し任命する。

●カードル・テクニック・エタ（Cadre Techique État，以下 CTE）

ナショナルレベルのコーチや FFJDA の国家的レベルで仕事をする柔道国家公務員。

●カードル・テクニック・フェデラル（Cadre Technique Fedreal，以下 CTF）

レジョン，インターレジョン地域における管理職として地方における指導責任者。

現在 FFJDA に登録されている指導者のうち，CT 資格者は CTE（74名），CTF（93名）の計167名おり，彼らは国家的レベル，あるいは地方の責任者として柔道に専従している。FFJDA 全体では6,423名の柔道指導者が登録されている[12]。

(3) BEES１級の試験の内容

１．一次試験

トロン・コモン（Tronc Commun）と言われる共通試験（全競技に共通したもので，この試験にパスしなければ次の二次試験を受けることができない）で，フランススポーツ青年省の歴史，組織，バイオメカニクス，解剖学，生理学，精神教育学，法律学などスポーツ全般に渡る学科試験である。体育大学に在籍している学生は，２年次が終了した時点でこの資格が認められる優遇措置がある。

２．二次試験

グループ A（筆記と口答試験），グループ B(教育方法としての柔道理論と指導方法，生理学)，グループ C（柔道実技，形，乱取，柔術）の３カテゴリーの試験内要になっている。試験期間は３日間，柔道に関する専門的な知識，指導方法，理論，口答試験が問われる。

ア）グループＡ（50点）

柔道理論，発展，歴史，価値，教養，柔道が有する他の競技と異なる点，柔道の関するトレーニング方法，その理論等の筆記試験。

口答試験は柔道のルール，運営，組織の説明など。

イ）グループＢ（70点）

実際に指導できるか実技試験を行う。

柔道を教育的に指導できるか，初心者にどういった方法で教えるのか，小学生10－20名を対象に実践する。その後，なぜその方法で指導したか，その理由を口頭で試験官に答える問題が４問出題される。持久力，瞬発力，遊びながら耐久力をつけるには，バランスを良くするためのトレーニング方法は，など発達に応じた体力指導方法が問われる。また，子供としっかりと接することができるかなどコミュニケーション力を問い，さらに，柔

道理念である「自他共栄」,「精力善用」について子供たちにわかりやすく説明し，上手く伝えることができるかなどが出題されている。

ウ）グループＣ（60点）

乱取，打込，投げ込み，形（投の形，固の形，極の形），柔術のデモンストレーションを行う。柔道，柔術の技能レベルを審査する。

得点は180点満点の絶対評価で，90点以上を獲得すると合格となるが,「日本の試験で言うなら100点満点中70－80点以上に相当するだろう」と審査員の一人が語っていた。フランス北西部に位置しているポワ・トウーシャロント地域圏（４県で構成）では04年に65名が受験し41名が合格（66％），03年には63名が受験し32名が合格（54.4％）した実績がある。

(4) BEES2級の試験内容

１．一次試験

トロン・コモンに関しては領域及び内要的にはBEES1級と同様であるが，より高度な専門性，知識が問われる。

２．二次試験

BEES1級同様に３カテゴリーに分類されている。

ア）グループＡ（60点満点）

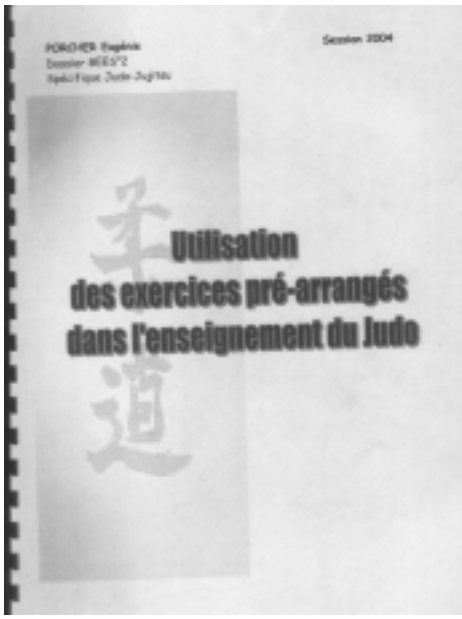
（筆記試験と口答試験）

すでに柔道を経験しているものを指導するための試験であるから，柔道に関するよりレベルの高い知識，理論が問われる。法律，戦術，社会学，トレーニング方法などや今後おける課題，規則等に関して筆記と口頭試験が課せられる。

イ）グループＢ（80点満点）

（論文と実践指導）

技能も高度なレベルが要求され，独自の練習方法も問われ，科学性や合理性が求められる。特に教育的観点からの指導方法が問われる。実施する実技内容等を事前に論文にまとめ提出しなければならない。15歳から18歳の生徒を対象に実技指導を行い，実施した指導理論を口頭で試験官に説明する。



BEES2 級提出論文

ウ）グループＣ（40点満点）

（柔道実技，形，柔術等）

立技，固技，形（投の形，固の形，極の形，柔の形），柔術（防御方法と乱取）の演武を行う。実演する形の種類も多くなるが，柔道技術，柔術に高いレベルの独自性が求められ，自分で考案したオリジナルなテクニックを取り入れなければならないなど，相当に高度な技能が必要となる。

合格点数に関してはBEES1級と同様であるが，BEES2級は専門競技試験に合格した後，トロン・コモンを受験しても良い。

(5) BEES 認定競技団体

以下の競技団体がBEESの認定団体として,国から認められている。

- 水泳活動（スポーツ水泳，シンクロナイズドスイミング，フィンスイミング，ダイビング，ウォーターポロ）
- 馬術活動
- 体操活動
- 調整された体力・スポーツ活動（精神障害者）
- 全ての人のための体力活動
- 合気道

・登山（高山のガイド，ガイド志望者，平均的な高さの山のガイド）
・アスレチック（陸上）
・ボートレース（漕艇）
・バドミントン
・野球，ソフトボール
・バスケットボール
・ビリヤード
・ボブスレー
・ボクシング
・ボックスフランセーズ（フランス式ボクシング）
・カノエ（カヤックに似たような競技）
・ランドヨット
・競走
・自転車競技（伝統的なもの，ビクロス，マウンテンバイク）
・エスカラード（岩登り）
・フェンシング
・サッカー
・ゴルフ
・重量挙げ，ボディービル，筋力トレーニング
・ハンドボール
・体力障害者，感覚障害者
・芝生上でのホッケー
・アイスホッケー
・柔道，柔術，その他似たような種目
・空手
・レスリング
・フィットネス
・オートバイ競技
・パラシュート
・アイススケート
・ペロタバスク
・近代５種競技
・水中ダイビング
・ローラースケート
・ラグビー
・13人ラグビー
・サンボ
・アルプススキー
・クロスカントリースキー
・水上スキー
・洞穴探検
・球競技
・スカッシュ
・サーフィン
・テコンドー
・テニス
・卓球
・アーチェリー
・スポーツ射撃
・トランポリン
・ハングライダー飛行
・座った状態でのハングライダー飛行
・ヨット
・バレーボール

Ⅴ．考察及びまとめ

フランスでは INSEP を頂点に，地方にも設置されている PF や PE 等の存在など，FFJDA の組織が国家レベルで管理され，我が国を凌ぐほど養成システムが良く整備されている。また，国家管理されている指導者資格制度，柔道専門国家公務員など，日本では見られない優遇されたシステムが確立されている。さらに，幼年，少年など有級者対象の帯色は，白帯に始まり，白黄色段だら帯など八種類の色分けをし，技術の進歩度合いなどによって帯の色を変え，昇級したことがわかりやすいように工夫し，モチベーションを高めるためのシステムが確立されている。さらに，柔道が「教育的価値の高いスポーツ」であることをアピールしたポスターやテレビのコマーシャルなどを媒体として，積極的に広報宣伝活動を行い，普及拡大に努めている[12)]。こうした長年にわたる自助努力がフランス柔道大国化に繋がっているものと考

表１　フランス柔道連盟・各級における色帯と年齢区分

	８級	７級	６級	５級	４級	３級	２級	１級
白色	白・黄色	黄色	黄色・オレンジ	オレンジ	オレンジ緑	緑	ブルー	茶
初心者	７歳	８歳	９歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳

FFJDA の各級毎色帯

えられる[13]。

しかし，アテネオリンピックにおいては，銀メダル１個（女子48kg 級 F. ジョシネ）のみという惨敗に終わった[14]。その屈辱から組織の大改革が見られ，あらゆる面で深省し危機感を感じている様子が察せられた。前述したように，会長人事の交代のみならず，現場最高責任者６代目 DTN に B.デディエ（1982年から66kg 級世界女子選手権３連覇）が，女性として初めて最重要職であるこのポストに就任（2005年９月）したことからも窺える。技術的にもこれまで取り入れてきたヨーロッパ柔道スタイル（接近戦から肩車，朽木倒を中心とした柔道）に対する見直し，批判が盛んに論議されていた。近年，IJF がダイナミック柔道を推進していることから[15]，判定や反則で勝ちを得るのではなく，柔道本来の魅力である「投げ」，「抑え」などの積極的な技の攻防により勝敗を決しようとする方向性やゴールデンスコア方式導入（延長戦方式）などに見られるルール改正の観点からも，フランス指導陣に強い意識改革が芽生え始めていることを察知することができた。

フランスに限らず，ヨーロッパの柔道家は日本柔道のスタイルを「クラシック柔道（間合いをとり，両手でしっかり相手の柔道衣を握り，技を仕掛ける）」と呼んでいるが，そのクラシック柔道を吸収し取り入れる必要があるのではないか，といった意識が急速に高まってきている。彼らとの MONDOU（問答−質疑応答のことで，柔道専門用語として日常的に使われている）において，筆者に対する口答質問で，「なぜ我々フランス柔道は勝てないと思うか」と聞かれた。少し間をおいて「日本と比較してコーチング力が足りない」と答えた。その理由は「基本技術より，肩車などの変則的な技を優先的に小さな子供達に教えている。基本の技を反復し，袖と襟を両手で握って技をかける柔道の技術を習得することが，将来世界で活躍する選手育成に繋がる。基本技から応用技に入ることが大切だ。指導者がそれを伝えていない。フランスの組織は怖いが，指導者は怖くない」と付け加えた。彼らにとっては，歯痒い思いだろうが筆者の考え，思いを率直に伝えた。

彼らの意識改革が進み，基本を重視した指導方

高段者指導者講習会にてⅠ(クロゾンにて)

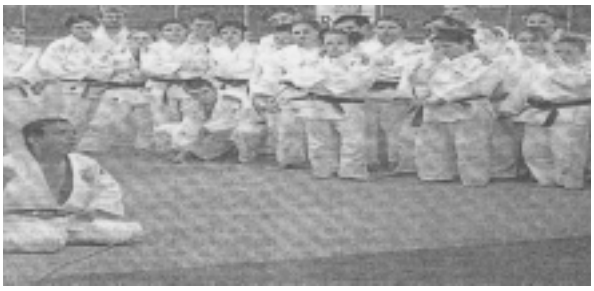
高段者指導者講習会にてⅡ(クロゾンにて)

法など一層コーチング力が向上すれば，フランス柔道が日本に追いつき，追い越す時もやがて来るのではないかとの推測もされ得る。

ブルターニュ地方での指導

Judo

Un entraîneur japonais à Rennes. Le Dojo régional, à Rennes, s'est offert la présence d'un professeur de luxe mardi soir, en la personne de Hatsuyuki Hamada (*photo*), 7e dan, ancien entraîneur de l'équipe japonaise féminine et notamment de Ryoko Tamura, championne olympique des moins de 48 kg à Sydney et à Athènes. Plus d'une centaine de judokas ont profité des leçons de l'entraîneur japonais, qui effectue une tournée en France dans le cadre du projet « Judo Renaissance », initié par la Fédération japonaise. « Ce projet a vu le jour afin de revenir aux racines du judo, la compétition prenant de plus en plus le pas sur les valeurs de ce sport. M. Hamada visite ainsi plusieurs villes de France afin de voir comment nous fonctionnons. Pour les jeunes, c'est aussi un moyen formidable de progresser. Ils sont forcément plus attentifs quand ils ont un professeur comme lui en face d'eux », explique André Boutin, conseiller technique à l'interrégion (Bretagne, Pays de Loire, Normandie). André Boutin, qui accompagne l'entraîneur japonais dans les villes visitées, notamment Le Mans ce week-end à l'occasion des interrégionaux juniors.



レンヌにおけるポールフランスでの指導が新聞に掲載

Judo 150 formateurs sous la baguette de Maître Awasu

Le judo Français en stage à Crozon

Les meilleurs formateurs du judo français ont investi Crozon, pour un stage d'une semaine, encadré par maître Awasu et Jean-Luc Rougé.

Rassemblement de très hauts émissaires du judo français, à Crozon depuis lundi, pour un stage de cinq jours centré sur des cours techniques. Au tatami, Maître Shozo Awasu, « **bibliothèque du judo** », un des pionniers de son enseignement en France, 9e dan et toujours bon pied, bon œil à 83 ans. Les cent cinquante stagiaires, professeurs nationaux de niveau minimum 4e dan, ont su apprécier l'expert. Avec lui Jean-Luc Rougé, collectionneur de médailles à une certaine époque, avant de devenir président de la fédération française, accompagné de Larbi Benboudaoud, jeune retraité lui aussi multi-médaillé.

Durant toute la semaine, ces professeurs-stagiaires se retrouveront sur les tatamis, à raison de cinq heures par jour. Ce genre de stage comporte un thème dominant et des plages communes. « **L'idée,** selon Didier Janicot, adjoint au directeur technique national, **étant d'en faire dans plusieurs endroits en France. Quatre pôles, associés à l'institut du judo de Paris étant ainsi planifiés.** » Dont celui de Crozon en passe de devenir une des places fortes du judo français.

Jean-Marie Hoareau

Larbi Benboudaoud, médaille Olympique, Jean-Luc Rougé, Président de la fédération Française de Judo, et Eugène Domagata, coordinateur technique national Jiujitsu : trois des personnages du sport de combat français.

Texto Ouest France du mardi 26 avril 2005

FFJDA 会長 J.ルージェ，（中央）シドニーオリンピックメダリスト・L. ベンブドウ．筆者のショットが新聞に掲載（クロゾンにて）

筆者の講習会内容が DVD として FFJDA から出版

フランス人の柔道に対する愛情，情熱，我が国をはるかに凌ぐ登録者数，また整備された組織は我々日本人の羨望に値するものであり，世界で覇を競う強豪国の中でも最大の強敵であり，柔道日本を脅かす存在であることに疑う余地は無い。調査結果から，フランス柔道と比較することによって，日本柔道の課題を見出すこともできた。グローバル化していく中で新たに登場してくる柔道スタイルに捉われることなく，今後も堅持し頑なに伝承していかなければならない古人より伝えられる伝統的練習方法や技術が如何に重要であるか再確認することができた。

引用文献

1）岡田弘隆・青柳領・中村勇・南條充寿・林弘典，フランスと日本の青少年柔道練習者の実態と意識調査，武道学研究，33(1)，pp.31-39，2000.
2）尾形敬史・小俣幸嗣・鮫島元成・菅波盛雄，競技柔道の国際化ーカラー柔道衣までの40年ー，不昧堂，pp.222-224，1998.
3）竹内善徳編著，柔道指導者研究会編，柔道の視点ー21世紀へ向けてー，道和書院，pp.43-44，2000.
4）尾形敬史・小俣幸嗣・鮫島元成・菅波盛雄，前掲

書，pp.164-166.
５)松下三郎・藤田真郎，IJF 総会報告，柔道．74(11)，pp.60-70，2003.
６）松下三郎・藤田真郎，IJF 総会報告，柔道．76(11)，pp.62-68，2005.
７） 2005年度 FFJDA 内部資料 DONNEES GENERALES, 2003-2004
８） 山田奨治・アレキサンダーベネット編，日本の教育に“武道”を－21世紀に心技体を鍛える－，明治図書，pp.70-71，2005.
９） FFJDA. -Textes officiels 前文, FFJDA, 2004 - 2005.
10) 脇田泰子，風速計，体育科教育，53(10)，p.27，2001.
11) FFJDA 内部資料，前掲.
12) FFJDA 内部資料，前掲.
13) 全日本実業柔道連盟，’97世界道選手権大会視察・フランス柔道調査報告書(2)，柔道69(4)，pp.60-68，1998.
14) 杉山重利編著，武道論十五講，不昧堂，pp.63-64，2002.
15) 佐藤温夏,アテネ五輪大会総括，近代柔道，26 (10)，pp.56-57，2004.
16) 中村勇，アテネ五輪をデータで解く/前編，近代柔道，26 (10)，pp.58-61，2004.